**東洋古典学対訳**

文責　葛西

『海市　并叙』

[叙]私は登州に海市(蜃気楼)が出ると、聞いていた。(土地の)が言うには、「(蜃気楼は)いつも春や夏に出ている。今は年末なので、今年中に再び見ることはできない」と。私は知事として(登州に)赴任して(わずか)五日でこの地を去ることになった。(蜃気楼を)見ることができなかったことを残念なこととして、海神広徳王の廟に(蜃気楼を見たいと)祈り、その翌日に(蜃気楼を)見た。そしてこの詩を作った。

[一]東のほうに雲が多く湧き、空が広がっている。

　　多くの仙人たちが透き通った(空の)中に現れては消える。

　　(神が)世の中を揺り動かして諸々の物事を生み出すが、

　　どうして貝殻の宮城の門が玉製の宮殿をその中に入れていることがあろうか。

[二]本当は知っている、見えるものがすべて幻覚ということを。

　　しかし私は誠心誠意祈って、神に海市を出現させていただいた。

　　気候は寒く、水は冷たく、天地は静まっているが、

　　(神は)私のために虫を起こし魚や竜を鞭打つ。

　　重なった楼閣や緑の丘が霜の降りた朝(の海)に現れ、

　　(冬に海市が現れる)奇妙な出来事は(物知りの)百歳の老人も驚きに腰を抜かさせる。

[三]世間にあるもので(人が)手に入れるものは努力して獲得するべきである。

　　人の世の外には(人が得るべき)物が無く、(そこでは人の)優劣が決まらない。

　　いきなりの要求があっても(神は)私を拒まなかったので、

　　(今までの苦難は)本当にであって天からの罰では無かったのだ(と分かった)。

[四]潮陽の太守(である韓愈)が南方に左遷され(た後に都に)帰り、

　　(その際)喜んで見た、石廩や祝融がうず高くそびえる様を。

　　(韓愈)自身が言うに、(自分の)が山の神の心を動かし(山を見ることが出来)たと。

　　どうして分からないだろう、造物主が(彼の)失意のさまを憐れんだことを。

　　(憂いにしかめた)眉を伸ばしてひと笑することは、どうして簡単にできようか。

　　神があなた(韓愈)に応えたことはまた既に(気力が)充実していたことだ。

[五]（夕方になり）斜めに差す陽はどこまでも照らすようで、一匹の鳥が(海の彼方に)消えた。

　　ただ見えるのは、碧い海が青銅の(鏡の)磨かれた(ように穏やかな)さま。

　　(この様を描くのに)新しい詩や飾り立てた言葉をどうして用いようか。

　　(海市も私も)ともに移り変わり、東風に従って(この地を去ろう)。

『陳昱被冥吏誤迫』

　今年の三月、中書吏の陳昱という人が、突然死んで三日後に蘇ったという。(彼が言うに

は)初めに穴のある壁が見えた。(壁の向こうに)人がいて穴から何かを投げ入れ、(それが)

地面に落ちて人となった。(その姿は)彼の亡くなった姉であった。(姉は)彼の手を引いて

穴から出て言うには｢冥界の役人があなたを追い立て、私に先導を命じました｣と。（彼は）

そばに役人がいるのを見た。（あたりは）真っ暗で夜のようであり、ずっと遠くを見ると明

るい所がある、(そこの)空には橋があり、立札に『会明』とあった。そこの人は皆、泥の

銭を使っていた。橋は非常に高く、その上を行く人がいる。姉が言うに「あれは天国に行

く人です」と。一行は橋の下を通ったが、そのさらに下にも人がいる。彼らは鳥につつか

れていた。姉が言うに「あれは（生前）網で（鳥を）捕まえていた人です」と。また橋が

見えて(名前を)『陽明』と言った。そこの人は皆紙の銭を使っており、役人の部署につい

ているものが十人ほどいて、書状と銭を持った人がいると、役人がすぐに金を取る様は、

現世での抽貫の徴収のようである。

　そうして冥界の長官を見てみると、(亡き)陳襄述古であった。彼は昱になぜ乳母を殺し

たか問うた。昱が言うに｢そんなことはありません｣と。そこで乳母を呼ぶことになった。(彼

女は)血が顔を覆い、赤ん坊を抱いていた。昱をじっと見て(乳母が)言うに｢(殺したのは)

この人ではありません。門下の役人の陳周です｣と。長官は昱を放免し、帰る際に言うには

「道は遠い。(彼に)竹馬を与えよ」と。また色々な役人に自分の帳簿を調べさせると、役

人が示した寿命は六九歳であった。官職は左班殿直であった。(役人？長官？が)言うに「日

ごろ(死者に)香を焼いていないせいで、そんなに長寿ではないのだ」と。また言うに「私

はこの一件を変えよう。これと同じくはしない」と。その意味はきっと帳簿より寿命を伸

ばすということだろう。昱は帰る道すがら、陳周が追い立てられて行くのを見ると(思うと)、

蘇生しており、周は死んでいたということだ。

『李氏子再生説冥間事』

　元符元年、私は儋州にいた。城の西の住人の李氏の未婚の娘が病死した後二日で蘇生し

たと聞いた。私は進士の何旻と共に李氏の家に行って父親と会い、その様子を聞いた。(父

親が)言うに｢(あたりは)初めは暗く、(娘は)引っ張っていく人がいるようで(気づくと)役

所に着いていました。長官が(娘を見て)言うに『この者は間違えて追い立てた』と。ある

役人が『少しの間牢に入れておきましょう』と言い、別の一人が『この人は無罪だ、帰す

のがよい』と言いました。牢獄は地中の穴にあって、そこにトンネルを掘って出入りして

います。牢に繋がれた人は皆ここの人です。僧の住居が十七八あって、そこに一人の老婆

で全身に黄色い毛が生えてロバのようなのがいて、枷をされて座っています。娘は彼女を

知っておりまして、きっとここの坊さんの妻だろうとのことです。(彼女が)言いますに、『私

は檀家の銭や供物を横領した罪でここに座っており、もう三度も毛が生え変わった』との

ことです。

　また一人の坊さんも娘と同郷の人でして、死んでからすでに二年経っています。その人

の家では喪明けの祭をしておりまして、大皿に盛った食事と数千の銭を持ってきた人がい

て『某さんにやりなさい』と言います。坊さんは銭を貰うとそれを数百づつに分け、番人

に渡し、食事を持って門の中に入って行ってしまいました。牢に繋がれた人が皆争って食

事を奪いました。坊さんの食事は、ほとんど無くなっておりました。また別の坊さんがや

ってきて、その人を見るとみんなひざまずいて挨拶をします。坊さんは『この女を、人を

やって速やかに(現世に)戻しなさい』と言いました。娘を送った人は、手で(周りの)土塀

を壊して娘を通らせて、川に出てきました。船がありまして、それに娘を乗せまして、送

った人が船を押すと船が揺れ、娘はそれに驚いて起きたということです」と。この僧はき

っと地蔵菩薩であろう。ここに書いてこれを世の戒めとする。

『子姑神記』

　元豊元年一月一日、私ははじめて都を去って黄州に来た。二月に黄州の郡に到着した。

その翌年、進士の藩丙が私に言うには｢不思議でございます。あなた様が流罪の判決を受け

たことをここの人はまだ知らなかったのです。しかし神の他所から来た郭氏の家に降りた

ものがいて、人と打てば響くように問答し、さらによく詩を書いて言うには『蘇公が丁度

着こうとしている』と。私は疑っていたのです。その日にあなたがここに着き、神は去り

ました」と。

　その翌年の正月、丙がまた言うには「神がまた郭氏の家に降りました」と。私は行って

見てきた。神は草木に服を着せて婦人としたものに火箸を持たせたものだった。二人の子

供がこれを支えていた。火箸で字を書いて神が言うに「私は寿陽の人です。姓は何、名は

媚、字は麗卿、幼いころから読書し文章を書きました。楽人の妻となったのです。唐の垂

拱の頃に、寿陽の地方官が夫を殺し、私を引き取って侍女としましたが、正妻がひどく嫉

妬深く、厠で殺されました。私は死んでも不平を訴えませんでした。天帝の使いがこれを

見て、私のためにこの濡れ衣を晴らして世の知るところにしてもらいました。世の中に言

う子姑神は、似たものが非常に多くいますが、私のように腕が優れたものはいません。あ

なたは少しここにいてください、詩を作り舞をして楽しませましょう」と。

　数十篇の詩が素早くあっという間に出来上がり、皆発想が素晴らしく、皮肉を交えてい

た。神仙や幽霊、仏の化ける理を聞くと、答えは全く思いもしない所から出た。客が手を

打って『道調梁州』を歌うと、神は曲に合わせて舞った。曲が終わると神は二度礼をして

私に頼んで言うに「あなたの文筆の名声は天下に知れ渡っています。どうしてわずかな紙

を惜しみ、世の人に私のことを知らしめてくれないのでしょうか」と。

　私は何氏の生涯を思うと、酷い役人にさらわれ、嫉妬深い妻にいじめられ、恨みは深い

であろう。しかし彼女は役人の名を言わず、道徳を弁えているようである。来た客の生活

を言い当てるが、秘密や吉凶を言わないのは、分別があるといってよい。また、読み書き

ができて世間に知られていないことを恥じる。これは皆賢いというべきである。ざっとこ

のことを記して、彼女の頼みに応えることとする。

『天篆記』

　南方では俗に幽霊を崇める。正月に、必ず衣服と箒、塵取りで子姑神を作り、あるもの

はしばしば字を書く。黄州の郭氏の神が最も変わっていた。私は去年何氏の記録の中でこ

れを書いた。今年はここの汪若谷という人の家の神が最も変わっていた。火箸を口にして、

筆を口にくわえ、人と打てば響くように問答した。神が言うに「私は天人である。名は全、

字は徳通、姓は李である。若谷のおかげでまた世間に主張できるようになった。私はこう

いうわけで降りたのだ」と。篆字を書いたが、運筆は奇妙で、どんな字が分からなかった。

神が言うに「これは天の篆字だ」と。私に三十字の篆字を与え、天蓬呪だと言った。隷字

で読み解こうとしたが、できなかった。

　ここの進士の張炳を見て神が言うに「久し振りだが元気か」と。炳がどうして自分を知

っているか問うと、それに答えて言うには「あなたは劉苞を忘れたか。私は苞だ」と。そ

して神は炳が昔苞と一諸に行動し、語ったことを詳しく話した。炳は大変驚いて私に言う

に「昔、都で苞と顔見知りでした。彼は青い頭巾に布の衣で、文士でありながら酒を好ん

でいました。斉州の人と言っていました。今はどうしているか知りません。本当に天人な

のでしょうか」と。ある人が言うには「天人がどうしてわざわざ塵取りや箒に取り憑いて

子姑神となるだろう。汪若谷がからかっているのだ」と。私はそうではないと思う。全が

幽霊であろうが仙人であろうが、もともと知ることはできないのだ。だが取り憑くものが

卑しいものだからと言って神かどうか疑うべきではない。彼にはしっかりとした考えの筋

道があり、王宮も厠も同じに見える。字は分からないが、趣は古風である。墓場をうろつ

くおろかな幽霊で供物を盗み食いするもののはずがない。

　昔、長陵の女性が産後に死んで、神として兄弟の妻の宛若の前に現れ、多くの人が祠に

参詣した。その後、漢の武帝がまたこれを祀った。神君と言って、天下を動かした。もし

この神が降りた所を疑えば、それは全の降りた所より卑しい。人が一生で見るものは少な

く、見ないものの方が多い。どうしてちょっとした見分で、この世の外のことを推し量れ

よう。しばらくこの全の書を保管して、この字を読める人が現れるのを待とう。